

# 台湾総督府版初等教育年間国語教科書の基礎的研究

## —「民族」の使い分けに着目して—

日下部 龍 太

### I. はじめに

日本統治下台湾では、第一期（1901-03年出版，1901-14年使用）から第五期（1942-44年出版，1942-45年使用）に至る全五期にわたって台湾総督府の初等国語教科書が出版された。しかし、これは従来の研究で語られる「台湾人＝漢人」という観点から見た場合であり、前述全五期の教科書はすべて漢人用である。実際は、これ以外に原住民用の初等国語教科書が1915-16年，1928年，1930-32年の三度にわたって出版されている。また、これら三度にわたって出版された原住民用教科書も一系統の学校で使用されたわけではなく、詳細は後述するが1915-16年と1930-32年に出版された教科書、および1928年に出版された教科書の二系統に大別できる。一方、従来で述べるところの漢人の第五期の教科書に関しても正確には漢人と二系統の原住民をあわせた三者が使用する三者の統一教科書であった。本稿は、第一期から第四期の漢人用教科書、二系統の原住民の三度にわたる原住民用教科書、および三者の統一教科書である従来語られるところの第五期教科書の計八教科書を考察するものである。

日本統治下台湾初等国語教科書の終着点である第五期は、1941年12月の太平洋戦争勃発以降の教科書であり、戦争を意識した教材や国家意識高揚を企図した教材が極端に増加しており、確かにそれ以前の教科書とは性格を異にしている。しかし、従来の研究<sup>(1)</sup>は教材の「軍事化」という一点に収斂されており、台湾特有の「民族」の権力構造解明の視点が欠けていた。戦時下の教科書が「軍事化」という特徴を持つのは、ある意味において当然の成り行きである。本稿では、後述するように『台湾人』を六つの視点から考察することによって、「軍事化」以外に「民族」の視点を戦時下台湾の国語教科書議論に提起したいと考える。「民族」の視点の提起は、日本統治下台湾における教育の背景を一層明確にすることへの寄与を期待できる。次頁の表1に本稿における六つの『台湾人』を示す。

本稿における六つの『台湾人』とは、「日本人」、「台湾人」、「漢人」、「原住民」、「平埔族」、「高砂族」のことである。二重鉤括弧の『台湾人』と鉤括弧の「台湾人」は完全に同じ人々を指すが、前者は台湾の人々という一般呼称として用いており、後者は他五者との比較の際に用いている。「日本人」は、特に戦時下において「台湾人」を戦争協力に導く口実として使用された平等というスローガンの「日本人」である。台湾在住者に占める各々の比率は、1936年時点で「日本人」99.22%、「台湾人」93.71%、「漢人」89.85%、「原住民」3.86%、「平埔族」1.07%、「高砂族」2.79%である<sup>(2)</sup>。また、「平

表 1. 本稿における六つの『台湾人』

台湾 在住者	中国人・欧米人など			
	「日本人」	内地人・朝鮮人		
		「台湾人」	「漢人」	
			「原住民」	「平埔族」 「高砂族」

註. 表 1 における「台湾在住者」、「中国人・欧米人など」、「内地人・朝鮮人」は六つの「台湾人」に含まれない。

埔族」とは一般行政地域（一般法が適用される漢人居住地域）に住む原住民のことであり、「高砂族」とは「蕃地」（特別法が適用される非漢人居住地域）に住む原住民のことである。1915-16 年と 1930-32 年出版の教科書を使用した「平埔族」は平地の原住民、対して 1928 年出版の教科書を使用した「高砂族」は山地や東部の原住民を概ね指している。

従来の研究は、六つの『台湾人』の中で「漢人」の視野のみから述べられており、実態としての台湾の多民族性が見落とされていた。本稿は、日本が時と場合に応じて六つの『台湾人』を使い分けることで統治を円滑に行おうとしていたという仮説に立ち、その中でも「日本人」と「台湾人」が最も端的に表れている第五期を中心に分析し、その仮説の検証を試みるものである。分析対象の教科書が膨大であり、六つの『台湾人』すべての分析はできないが、本稿では第五期に至る過程を分析した上で、第五期に表れた「日本人」と「台湾人」に関して分析を行うこととする。本分析は、台湾における日本の民族支配の解明を試みた研究として位置付けられる。

本稿の分析方法としては、後述の日下部・渡部論文<sup>(3)</sup>を分析するという形で行いたい。この論文は、『台湾人』用の全八教科書の全巻の全課を台湾総督府の分類手法<sup>(4)</sup>に基づいて「皇室・国家」や「動物・植物・鉱物・博物」など 12 分類した教科書の「分類データ」、およびその内容変遷を折れ線グラフに示した「分類グラフ」の二つから主に構成されている。しかし、全 21 頁の計 20 頁が前述二つのデータまたは分類手法などの手続きに関する記載であり、本データが示す教育的意味合いは十分に示すことができていなかった。そのため、本稿では頁数の問題で文章による説明ができなかった日下部・渡部論文のデータを文章として簡潔に再構成するという課題も帯びている。

本稿で初等国語教科書进行分析対象として設定した理由は、同時期に初等国語以外の他教科で『台湾人』の構成者である「漢人」、「平埔族」、「高砂族」の台湾総督府版の教科書が併存しないからである。中等学校以上や他教科では比較分析が不可能であるため、本稿では初等国語教科書进行分析対象として設定している。前述の通り、本稿の中心となる第五期は、「軍事化」という特徴以外に、最初で最後の『台湾人』の“統一”された国語教科書という特徴を有している。すなわち、台湾では 1930 年代を中心に「漢人」、「平埔族」、「高砂族」用の各台湾総督府版国語教科書が併存した事例などのように、一度も“統一”されていなかったのである。第五期を「漢人」用として分析した従来の台湾国語教科書研究は、「民族」の視点が抜け落ちていた。この課題を克服するため、本稿では以下の章立てで分

析を行う。まず第Ⅱ章で系統立った総督府版教科書が初めて出版された1901年から台湾教育令<sup>(5)</sup>によって「漢人」と「平埔族」の初等学校が「公学校」として名目上統一される1922年までに出版された国語教科書について考察する。第Ⅱ章は、「漢人」のみ、または「漢人」と「平埔族」の国語教科書のみが存在した時期の考察である。第Ⅲ章では、1930年代を中心とした『台湾人』三者の教科書併存時期の国語教科書を考察する。その上で第Ⅳ章では、本稿の中心となる第五期の統一期国語教科書について考察する。そして、最後に第Ⅴ章で総括を行うこととする。「民族」の視点に関しては、「漢人」、「平埔族」、「高砂族」が主人公である教材で比較を行いたい。

## Ⅱ. 1901－1922年出版の『台湾人』の国語教科書分析

1901-1922年（以下、前期とも記載）は、「漢人」のみ、または「漢人」と「平埔族」の国語教科書のみが存在した時期である。表2に国語教科書の概要を示す。

表2. 1901－1922年（前期）に出版された『台湾人』用の国語教科書

実際の教科書名	本稿における略称	出版責任者	巻数	出版年	使用年
『台湾教科用書国民読本』	『漢人一期国語』	台湾総督府（文教局）	12	1901-03	1901-14
『公学校用国民読本』	『漢人二期国語』	台湾総督府（文教局）	12	1913-14	1913-27
『蕃人読本』	『平埔前期国語』	台湾総督府（文教局）	4	1915-16	1915-22

表2の略称に示されている通り、『漢人一期国語』と『漢人二期国語』は「漢人」用であり、『平埔前期国語』は「平埔族」用の教科書である。表2は、教科書の使用年ではなく、出版年に基づいた分類である。初版出版以後の改版時（第一期から第二期などの改訂時ではなく、初版から第二版などの改版時）にも多少の修正は行われたであろうが、各期の教科書は基本的に出版以前に教科書記載の内容方針が定められる。そのため、使用年に焦点を当てて考察を行うと、台湾総督府の意図と合致しない考察結果となることが予想される。特に使用年の中でも後年は、後述する次期の教科書がすでに出版されており、台湾総督府の意向と合致しない点も多く想像される。それは、従来の教科書では不十分、あるいは不適切と考えられたために次期の教科書が出版されたからであり、当該期と次期の教科書との変遷期だからである。1901-1922年の前期国語教科書の全容は、前述の日下部・渡部論文に詳しい。この論文は、日本統治下台湾の1901年以降のすべての台湾総督府版初等国語教科書の分類を示しており、本稿もこの論文の分析に従った分析である。以下では、日下部・渡部論文の教科書分類データを文章にまとめることで、前期教科書の分析結果を示したい。

『漢人一期国語』は、「勤勉」を奨励する教材が充実している。『漢人一期国語』の「勤勉」を奨励する教材は、「勉強」（巻9第7課）などの学問奨励の教材、「マキワリ」（巻4第7課）などの労働奨励の教材、「保己一」（巻8第18課）などの学問奨励と出世を兼ね備えた教材の三つから構成される。

『漢人一期国語』は、この中でも学問奨励の教材の充実が著しく、労働奨励の教材も他の時期の教科書より充実しており、反対に学問に加えて出世までを兼ね備えた教材は極端に少ない。このことから、まずは教育の初歩的次元の教授が重視されており、権利などにも発展しかねない次元に関する教授が初期の段階で重視されていないことが読み取れる。『漢人一期国語』は、「身体・衛生」に関する教材の充実も著しく、具体的には「センタク」（巻4第16課）や「阿片」（巻8第16課）や「人体」（巻9第12課）などが教授されている。その他、「家庭・社会」に関する教材の充実も著しく、「家政」（巻12第15課）などの日常生活の指導に関する教材、「ハシラオニ」（巻4第9課）などの遊技に関する教材が充実している。すなわち、『漢人一期国語』は、全体的流れとして教育の初歩的次元の教授が重視されていたと指摘できる。

『漢人二期国語』は、第四期や第五期とは異なる分野の「皇室・国家」に関する教材が充実している。第四期や第五期の「皇室・国家」に関する教材に関しては後述するが、こちらは戦時下の教科書という時代背景を意識して「皇室・国家」の中でも戦争や殉死に関する分野の教材が多い。対して、『漢人二期国語』は、「皇室・国家」の中でも「明治天皇」（巻6第1課）などの皇室に関する分野の教材が突出している。『漢人二期国語』の分析からは、「皇室・国家」は三段階の変遷を経ることが判明する。第一段階は、『漢人一期国語』の「皇室・国家」に関する教材があまり充実していない時期である。第二段階は、『漢人二期国語』の「皇室・国家」の中でも皇室に関する分野の教材が突出している時期である。そして、充実の度合いに差はあるが、最後の第三段階である第三期から第五期の統一国語教科書にかけて徐々に戦争や殉死に関する分野の教材が充実していく。第三期の国語教科書は、『漢人二期国語』よりも「皇室・国家」に関する教材自体は減少しているが、「皇室・国家」の中でも戦争や殉死に関する分野の教材は増加している。すなわち、「皇室・国家」に関する分野の教授があまり重視されていない『漢人一期国語』、皇室に関する分野の教授が重視されている『漢人二期国語』、戦争や殉死に関する分野の教授が重視されている第三期から第五期の統一国語教科書という段階の変遷を提示できる。『漢人二期国語』の特徴を再確認すれば、皇室分野の重視であった。

『平埔前期国語』は、全4巻である。前後を含めた他のすべての教科書が一年に二冊の使用であるが、本教科書のみは一年に一冊の使用である。他の教科書と比較すると、『漢人一期国語』同様に「勤勉」や「身体・衛生」や「家庭・社会」に関する教材が充実している。また、「イヌ」（巻2第3課）や「ハナ」（巻3第2課）などの「動物・植物・鉱物・博物」に関する教材が充実している代わりに、「ヒノデ」（巻2第9課）や「台湾」（巻3第1課）などの「天文・地文・地理」に関する教材が少ない。『平埔前期国語』は、教授内容が『漢人一期国語』よりもさらに初歩に設定されていた。

### Ⅲ. 1930年代を中心に使用された『台湾人』三者の国語教科書分析

1930年代（以下、中期とも記載）は、『台湾人』の「漢人」、「平埔族」、「高砂族」の三者の国語教科書が併存した時期である。次頁の表3にこれら三者の国語教科書の概要を示す。

表3の略称に記載されている通り、『漢人三期国語』と『漢人四期国語』は「漢人」用、『平埔国語』

表 3. 1930 年代（中期）を中心に使用された『台湾人』用の国語教科書

実際の教科書名	本稿における略称	出版責任者	巻数	出版年	使用年
『公学校国語読本』	『漢人三期国語』	台湾総督府（文教局）	12	1923-26	1923-42
『公学校国語読本第一種』	『漢人四期国語』	台湾総督府（文教局）	12	1937-42	1937-44
『公学校国語読本第二種』	『平埔国語』	台湾総督府（文教局）	12	1930-32	1930-44
『教育所用国語読本』	『高砂国語』	台湾総督府警務局	8	1928	1928-43

は「平埔族」用、『高砂国語』は「高砂族」用の教科書である。『漢人三期国語』は、表 3 の教科書の中で 1920 年代においても長く使用された教科書である。本教科書を、1930 年代を中心に使用された教科書として含めた理由は、次期である『漢人四期国語』の全巻の出版完了が 1942 年であったことに大きな要因があり、第三期と第四期の間に教科書は出版されなかったからである。1923 年出版開始の『漢人三期国語』は、「漢人」と「平埔族」の両者に使用された教科書であるが<sup>(6)</sup>、1930 年からは漸次『平埔国語』に移行していく。また、ほぼ同時期の 1928 年には、従来内地人用や「漢人」用が混用されていた「高砂族」独自の国語教科書として『高砂国語』が出版される。これら「平埔族」と「高砂族」用の二教科書の出版は、「台湾人＝漢人」の脱却であり、『台湾人』を「漢人」、「平埔族」、「高砂族」の三者として強調していくことになる。「台湾人＝漢人」の脱却が背景にある以上、『平埔国語』と『高砂国語』は「漢人」用国語教科書の影響を受けながらも、その反発から作成されたと推察できる。『平埔国語』と『高砂国語』の前後に出版された「漢人」用の国語教科書である『漢人三期国語』と『漢人四期国語』を中期の分析対象として設定することは、『平埔国語』と『高砂国語』と「漢人」用国語教科書の比較分析としての意味合いも持つ。第Ⅱ章同様に、日下部・渡部論文の中期教科書の分類データを文章として以下に示したい。

『漢人三期国語』は、「模範・愚悪・公德」に関する教材が充実している。『漢人三期国語』の「模範・愚悪・公德」に関する教材は、「行儀・作法」（巻 11 第 10 課）などの模範を示している教材、「花さかぢい」（巻 4 第 28-30 課）などの愚かな行為を戒める教材、「公事と私事」（巻 12 第 11 課）などの公の利益を尊重した行動を求める教材、「震災美談」（巻 11 第 21 課）などの犠牲心を賛美する教材、「呉鳳」（巻 8 第 25 課）などの指導者的見地で記載されている教材から構成されている。『漢人三期国語』は、この中でも特に模範を示している教材の充実が著しく、犠牲心を賛美している教材や指導的見地から記載されている教材も確認できる。『漢人三期国語』は、模範という良い事例の提示を通して日本が望む人間像に「漢人」を育成しようと試みていると指摘でき、自らの犠牲心や指導の必要性も「漢人」に喚起していると述べられる。

『漢人四期国語』は、「皇室・国家」に関する教材の増加が著しく、前述のように「皇室・国家」に関する教材の中でも戦争や殉死に関する教材の増加が特に著しい。その他、「天文・地文・地理」に関する教材も充実しているが、「南洋だより」（巻 10 第 4 課）や「満州国」（巻 10 第 19 課）などのよ



うに戦時下の時代背景を投影した教材の増加が著しい。『漢人四期国語』は、戦時下の影響を色濃く反映した内容となっている。

『平埔国語』は、特徴指摘が困難であるが、前述の『漢人三期国語』と後述の『高砂国語』の中間的性格を帯びている。ここで述べる中間的性格とは、両者の平均を必ずしも意味しておらず、『平埔国語』には『漢人三期国語』や『高砂国語』に近い教材分布も確認できる。しかし、二つの教科書双方の教材割合を大きく逸脱した比率を示す事例はまったく確認できない、という意味である。

『高砂国語』は、全8巻であり、出版責任者も台湾総督府の警務局である。文教局は内地の文部省に該当する性格を有しているが、警務局は警察を管轄する役所である。警察を管轄する警務局が教育の責任を担っていることから、「高砂族」の教育が反乱を防ぐことに主眼が置かれていたと推測できる。『高砂国語』を他の教科書と比較すると「勤勉」に関する教材が充実しており、反対に「天文・地文・地理」に関する教材の教授が少ない。「身体・衛生」に関する教材もやや突出しており、『漢人一期国語』や『平埔前期国語』同様に他の教科書と比較して低次元の目標設定がなされていたことが確認できる。

#### IV. 統一期の国語教科書分析

1941年に「漢人」と「平埔族」を対象として国民学校令、「高砂族」を対象として教育所ニ於ケル教育標準がそれぞれ制定され<sup>(7)</sup>、『台湾人』三者の教育が内地の教育制度に接近した。その後、12月に真珠湾攻撃から太平洋戦争が勃発し、翌1942年から44年にかけて「漢人」、「平埔族」、「高砂族」の『台湾人』三者が使用する『統一五期国語』が出版された。表4にその概要を示す。

表4. 太平洋戦争下において使用された『台湾人』用の統一国語教科書

実際の教科書名	本稿における略称	出版責任者	巻数	出版年	使用年
『コクゴ』1-2, 『こくご』3-4 『初等科国語』1-8 <sup>(註1)</sup>	『統一五期国語』	台湾総督府（文教局）	12	1942-44	1942-45

註1) 『初等科国語』の巻1-8は、便宜的に巻5-12として表すこととする。

『統一五期国語』は、『台湾人』の共通用として初めて出版された教科書であり、比較研究それ自体は成立しない。しかし、教科書の内容面からは、明確に教科書の統一を意識して作成、または削除されたと推察される教材が存在する。一方、教科書統一前後ということが背景として推測できるが、中期段階までは六つの『台湾人』が「漢人」、「原住民」<sup>(8)</sup>、「平埔族」、「高砂族」の四分類に過ぎなかったものの、統一期の本段階では新たに「日本人」や「台湾人」が散見されるようになってくる。「漢人」、「原住民」、「平埔族」、「高砂族」は学び手である個々の児童を教科書記載内容に反映しているだけであるが、「日本人」と「台湾人」は学び手である個々の児童を超越した集合体としての存在である。統一期においては、教科書が統一されたという背景から「日本人」や「台湾人」という集合体を強調

することで、円滑に統治可能な児童を育成しようとしていたと考えられる。以下では、教科書の統一を意識して作成、または削除されたと推察される教材、および「日本人」や「台湾人」という集合体を強調した教材を中心に『統一五期国語』の分析を行いたい。

# （1）教科書統一を意識して作成された教材 ―「日本人」や「台湾人」の集合体を強調した教材―

「日本人」や「台湾人」の集合体を強調した教材は、教科書統一を意識して作成された教材の代表である。そのため、以下では「日本人」や「台湾人」の集合体を強調した教材を考察したい。

『統一五期国語』において「日本人」と「台湾人」の両集合体はともに強調されているが、「日本人」は理想の集合体として描かれているのに対して、「台湾人」は「日本人」を目指す集合体として描かれている。『統一五期国語』において『台湾人』が主人公として物語に登場する教材は二つのみである。数少ない収録数であることから、民族の理想的性格を有した厳選された人物のみが教材に採用されていると考えられる。また、民族を代表する人物が主人公であるという特性からは、「台湾人」や「日本人」がより一層色濃く表現されているとも推察できる。以下では、その二つの教材である「君が代少年」（巻7第6課）と「サヨンの鐘」（巻9第17課）を示すことによって、教科書統一を意識して作成された教材、および「日本人」や「台湾人」の集合体を強調した教材の説明としたい。なお、「君が代少年」の主人公は「漢人」の男の子であり、「サヨンの鐘」の主人公は「高砂族」の女の子である。ただし、両者は人物背景として「漢人」や「高砂族」という事象が示されているだけであり、教材内では「台湾人」や「日本人」として示されている。

## 【1. 「君が代少年」の場合】

「君が代少年」がどのような物語であるかを資料1に示すが、全文を紹介することは頁数の上でも理解の上でも本稿に適さないので、代わりに筆者要約を示したい。

### 資料1. 「君が代少年」（『統一五期国語』巻7第6課の筆者要約）

- ①昭和10（1935）年4月21日に台湾で大地震があり、当時公学校三年生であった詹徳坤<sup>せんとくこん</sup>は重傷を負ってしまう。徳坤は、治療所におけるつらい手当ての最中にも決して台湾語を口にせず、どんなに不自由でも学校での「日本人は国語を使ふものだ」との教えを守り、国語を使い通した。入院中に先生が見舞いに来てくれたときは、「先生、ほく、早くなほつて、学校へ行きたいのです。」と涙を流して喜んだ。先生は、「さうだ。早く元気になつて、学校へ出るのですよ。」と励ましたが、徳坤は重傷のため遠くの町にある病院に送られる。
- ②徳坤は死期を悟ったのか、夜明け近くに側にいた父に「おとうさん、ほく、君が代を歌ひます。」と言い、声が細くなりつつも最後まで君が代を立派に歌い通した。そして、君が代を歌い終えた徳坤は、その朝、両親や人々の涙に見守られながら、安らかに長い眠りについた。（筆者要約）

註）下線は日本の教えを特に強調している部分に引いている。

資料1の要点は、「公学校に通う<sup>せんたくこん</sup>詹徳坤が、どんなにつらいときでも学校の教えを守り、日本人であるとの理由で台湾語ではなく国語を使用し、死期を悟ってからも君が代を歌い切ってから亡くなる」である。「君が代少年」からは、日本人としての国語尊重および君が代尊重を読み取ることができる。詹徳坤は実在人物であり、類似した「漢人」のモデルが確かに存在した<sup>(9)</sup>。本教材は、文章だけではなく、その他に少年の母校である新竹州苗栗の公館公学校の詹徳坤銅像が挿絵として使用されており、読み手である児童により一層リアルな世界を伝えようと試みていると想像される。「君が代少年」を民族の視点から考察すると、「漢人」を否定していないが、「日本人」を奨励していると述べられる。言い換えれば、国語や君が代を尊重する「漢人」を「日本人」として尊重している。これは、条件を経れば、「漢人」も「日本人」として尊重されることを意味している。簡潔に述べれば、「日本人」として尊重されるためにこれらの条件を履行せよ、と「日本語」や「君が代」などを日本は求めていると考えられる。なお、「漢人」を「日本人」として尊重していると述べたが、本表現は「台湾人」を「日本人」として尊重していると言い換えることも可能である。それは、「君が代少年」が台湾総督府版の国語教科書だけではなく、文部省版教科書<sup>(10)</sup>や朝鮮総督府版教科書<sup>(11)</sup>にも登場するからであり、両教科書の読み手から見た詹徳坤は「台湾人（＝漢人）」であるからである。

## 【2. 「サヨンの鐘」の場合】

次に「サヨンの鐘」がどのような物語であるかを資料2に示すが、「君が代少年」同様に全文を紹介することは頁数の上でも理解の上でも本稿に適さないので、代わりに筆者要約を示したい。

### 資料2. 「サヨンの鐘」（『統一五期国語』巻9第17課の筆者要約）

- ①リヨヘン村のサヨンハヨンは、村の教育所を卒業して昭和10（1935）年に女子青年団員となった。しかし、卒業後まもなく母を失い、父も病気がちになってしまう。度重なる不幸にめげず、サヨンは家事と支那事変（日中戦争）以後の銃後の奉公にも献身的に励んでいた。
- ②日中戦争が本格化していく中で教育所の恩師にも召集命令が下る。恩師の出征に先立つ荷物運搬で、サヨンは真っ先に役を申し出る。駐在所の人は嵐の中で荷物を背負っての山道は大変だと17歳の小柄なサヨンを説得したが、「（日本の）兵隊さんの荷物を背負はせてください」と説得されて承諾する。
- ③嵐の後の山道は危険な悪路と化していたが、翌朝からサヨン他五名の一行は一度も休みを取らずひたすら道を急いだ。途中これ以上歩くことが危険なほどの豪雨となり、「私たちも一応引きかへしませう」と言い出す者もあったが、サヨンは「私たちは、今日中に荷物を運ぶ約束をしたのですから、ぜひ行きませう」と下山をすすめた。一行はこの橋さえ渡れば目的地まで残りわずかという橋に到着したが、今にもその橋は流されそうであった。一行は気をつけながら橋を渡ったが、サヨンは荷物とともに濁流に流されてしまう。サヨンはどうにかして荷物を流すまいとしていたが、すぐに濁流深く巻き込まれてしまう。



④現在、リヨヘン教育所の庭にはサヨンの碑と鐘が並んで建てられている。鐘には「愛国乙女サヨンの鐘」と銘が刻まれており、この鐘は長谷川台湾総督がサヨンの篤行をたたえて贈った鐘であった。（筆者要約）

註）下線は日本の教えを特に強調している部分に引いている。

資料2の要点は、「恩師のため、日本の兵隊さんのため、献身的な行動を試みたサヨンハヨンが不幸にも亡くなってしまふ。しかし、愛国乙女サヨンの篤行をたたえて碑と鐘が建立された」である。サヨンハヨンも実在人物であり、教科書教材としては台湾総督府版のみにしか確認できないが、「サヨンの鐘」は台湾や内地を問わず歌<sup>(12)</sup>や映画<sup>(13)</sup>として人気を博した。「サヨンの鐘」が所収されている『統一五期国語』の巻9は、全133頁の全19課で一課平均7頁であるが、「サヨンの鐘」は全14頁と最長レベルである。「君が代少年」と同様に愛国乙女サヨンの鐘の挿絵が挿入されており、読み手である児童により一層リアルな世界を伝えようと試みていると想像できる。「サヨンの鐘」を民族の視点から考察すると、「君が代少年」と同様に「高砂族」を否定していないが、献身的な「高砂族」を「日本人」として尊重していると述べられる。また、「サヨンの鐘」に関しても、歌や映画を通して「台湾人」を「日本人」として尊重していると言い換えることが可能である。特に映画においては、台湾の「原住民」としてだけでなく、「台湾人」としても述べられているからである。

## （2）教科書統一を意識して削除された教材—歴史上で活躍した漢人が主人公の教材—

「漢人」専用としての『漢人一期国語』から『漢人四期国語』までと「台湾人」三者用としての『統一五期国語』を比較すると、教科書統一を意識して削除されたと推察される教材がある。それは、歴史上で活躍した漢人が主人公の教材である。『漢人四期国語』では「呉鳳」（巻8第18課）と「鄭成功」（巻9第24課）と「孔子」（巻12第14課）の三課が存在したが、『統一五期国語』では古代の人物で道徳的色彩も帯びた「孔子と顔回」（巻12第6課）の一課のみに減少する。削除された「呉鳳」と「鄭成功」の教材は、その内容の特質から削除されたことが推察される。「呉鳳」と「鄭成功」の内容の特質を以下に示したい。

### 【1. 「呉鳳」の場合】

「呉鳳」は、「漢人」が「原住民」を指導する差別教材であり、『平埔前期国語』、『平埔国語』、『高砂国語』には確認できず、歴代の「漢人」用教科書<sup>(14)</sup>のみに確認できる。資料3に「呉鳳」の筆者要約を示すが、その差別性ゆえに『統一五期国語』からは削除されたと考えられる。

#### 資料3. 「呉鳳」（『漢人三期国語』巻8第18課の筆者要約）

親切で親のように敬われていた阿里山蕃通事<sup>(註1)</sup>であった呉鳳が、蕃人の首狩りの悪習をやめさせるため阿里山蕃に何度も忠告したが叶うことはなく、やむを得ず自分自身が首狩りの犠牲となる

行動を選ぶ。蕃人は呉鳳を殺してしまったことを悔やみ、罰を恐れたが、死んでしまう者まで発生する。そこで、蕃人は呉鳳を祭って、以後は首狩りをしないことを申し合わせた。首狩りがなくなったのは呉鳳の犠牲献身のおかげである。（筆者要約）

註1)「通事」とは、商務も司る通訳の漢人官吏のことである。

## 【2.「鄭成功」の場合】

歴代の「漢人」用の「鄭成功」<sup>(15)</sup>は、台湾の発展に尽力した人物として描かれており、母が日本人であることも記されている。前段階である中期の『平埔国語』や『高砂国語』に「鄭成功」は確認できず、まずは「呉鳳」同様に「原住民」への配慮が推察される。「原住民」から見て鄭成功は外来侵略者の一人に過ぎないわけであり、わざわざ一課を用意してまで教える対象にはならないのである<sup>(16)</sup>。また、『統一五期国語』は、「高砂族」用の教育所以外の内地・朝鮮・台湾のすべての初等学校の名称が国民学校に統一された時期の教科書であり、全地域・全教科の教科書記載内容が文部省版の教科書と近づく、または同一になっていたことも背景にあると考えられる。実際に、内地の歴史教科書である『初等科国史』（文部省、1943年）の上下巻は、台湾でも使用されていた。本国史から見て歴史的に重要な位置を占めていないためか、あるいは母が日本人であることをむしろ内地人向けには隠すためか、教科書の国定制度成立（1903年）以降の内地の初等教科書では一度も鄭成功が紹介されなかった。後者であるにしても、戦争協力などによる他の「日本人」化の手段ができ、本国史と関連が薄い鄭成功の血統を論じる必要性が薄れたのである。「原住民」への配慮、および内地・朝鮮・台湾の統一の方向性から「鄭成功」は削除されたと考えられる。

## V. 総括

最後に、本稿の確認を示し、その上で本稿の仮説に対する回答を示したい。

『漢人一期国語』、『平埔前期国語』、『高砂国語』からは、教科書の初歩的性格を確認できた。

『漢人二期国語』からは、皇室重視の性格を確認できた。

『漢人三期国語』からは、模範や理想を示すことによって日本から見た望ましい「漢人」を作ろうとしている姿勢を垣間見ることができた。

『漢人四期国語』、『統一五期国語』からは、戦時下の軍事化の影響を色濃く受けていることを確認でき、『漢人三期国語』の時期から戦争や殉死に関する教材が増加を始めていたことも確認できた。

『平埔国語』からは、「漢人」と「高砂族」用の教科書の間としての性格を確認できた。

『統一五期国語』からは、「漢人」、「平埔族」、「高砂族」の教科書統一による悪影響を避けるための「原住民」への配慮を確認できた。また、「日本人」として「漢人」や「高砂族」が尊重される過程も確認できるようになる。一方、対外的には「台湾人」が「日本人」として尊重されていた。

「日本人」や「台湾人」の使い分けで統治の円滑化を試みたという本稿の仮説に対する回答としては、「日本人」として尊重される「漢人」や「高砂族」や「台湾人」を確認できた。

本稿では、日下部・渡部論文がデータのみの提示であったことによる不足を補う役割を目指したが、分析対象の教科書が膨大であり、流れの提示にとどまってしまった。今後はさらなる詳細な分析を行うことで、日本統治下台湾の国語教科書に現出した論理を提示していきたいと考える。

- 註(1) 代表的な先行研究としては、許佩賢の「戦争時期的国語讀本解説」台湾教育史研究會『日治時期台灣公學校與國民學校 國語讀本 解説・總目錄・索引』（南天書局，2003年，79-92頁），陳虹彪の「1937-1945年における台湾の初等国語教科書と国定本の比較研究」研究代表者宮脇弘幸「日本植民地・占領地の教科書に関する総合的比較研究—国定教科書との異同の観点を中心に—」2009年3月『平成18～平成20年度科学研究費補助金（基盤研究（B）（一般））研究成果報告書』（71-84頁），および同陳の「日本統治下台湾における初等学校国語教科書の考察—1937年以降台湾人生徒用国語教科書に注目して—」『東北大学大学院教育学研究科研究年報』第54集，第1号（2005年，63-79頁）などを挙げるができる。
- (2) 『臺灣省五十一年來統計提要』（台湾省行政長官公署統計室，1946年，90-93頁）。
- (3) 日下部龍太・渡部竜也「台湾総督府版初等教育年間国語教科書の内容分類データ（一）—漢人及び原住民用教科書の「道徳教材」の場合—」『東京学芸大学紀要 人文社会科学系Ⅱ』第62集（2011年1月）。
- (4) 『蕃人読本編纂趣意書』（台湾総督府，26-27頁，1916年）に確認可能な「教材表」のことを指している。
- (5) 1922年の台湾教育令に先立ち，1919年にも台湾教育令が制定されている。1919年の台湾教育令を第一次台湾教育令，1922年の台湾教育令を第二次台湾教育令と呼んで区別することもあるが，本稿において第一次台湾教育令は登場しないので，本稿における台湾教育令はすべて1922年の第二次台湾教育令を指すこととする。
- (6) 『平埔前期国語』が使用されなくなる1922年から後継の『平埔国語』が全巻揃う1932年までの十年間は，「平埔族」用国語教科書が一定しておらず，『漢人二期国語』や『漢人三期国語』が使用されていた。詳細は，国府種武『台湾に於ける国語教育の展開』（第一教育社，1931年，287頁）に詳しい。
- (7) 「高砂族」用の学校である教育所は，『高砂国語』が全八巻（一年につき二冊を使用）であることから推察されるように四年制または三年制の学校であったが，1943年の教育所ニ於ケル教育標準改正で一部が六年制の教育所に変更された。
- (8) 「原住民」は，中期段階までにおいてもすでに散見されていた。日本は，時と場合に応じて「原住民」を「平埔族」と「高砂族」に分類する一方で，両者を同一視もしていた。
- (9) 村上政彦『「君が代少年」を探して 台湾人と日本語教育』（平凡社，2002年）は，「君が代少年」の少年のモデルを探した実録である。本書によれば，君が代少年のモデルは，新竹州苗栗の公館公学校に通っていた十二歳の漢人（客家人）少年詹德坤である。また，君が代を歌いながら死んでいったかどうかの真偽までは不明であるが，少なくともそれに近い事実があり，台湾総督府文化部の映画撮影などを通して改変・利用されたい。
- (10) 『初等科国語』巻3（文部省，1943年）の第4課に「君が代少年」を確認できる。なお，『初等科国語』巻3とは，本稿で述べる巻7に等しい。
- (11) 『初等国語』第四学年上（朝鮮総督府，1943年）の第4課に「君が代少年」を確認できる。なお，『初等国語』第四学年上とは，本稿で述べる巻7に等しい。
- (12) 渡辺はま子「サヨンの鐘」（西條八十作詞，古賀政男作曲，1941年）。
- (13) 台湾総督府・満洲映画協会・松竹株式会社製作「サヨンの鐘」（清水宏監督，1943年）。
- (14) 「呉鳳」は，『漢人二期国語』巻11第24課，『漢人三期国語』巻8第25課，『漢人四期国語』巻8第18課に確認できる。また，国語教科書の他に「漢人」用の『公学校修身書』巻4（台湾総督府，1914年）の第4課「仁義」など歴代の修身教科書にも確認できる。
- (15) 「鄭成功」は，その他に『漢人一期国語』巻10第13課，『漢人二期国語』巻10第7課，『漢人三期国語』巻9第23課，『漢人四期国語』巻9第24課に確認できる。

- (16) ただし、「平埔族」用の『公学校用日本歴史』下巻（台湾総督府，1934年，10頁）に鄭成功に関する記載を確認でき、「漢人」用の『公学校用日本歴史』下巻（台湾総督府，1923年，32頁）と同様の記載がなされている。歴史の教授対象となる「平埔族」の五・六年生は，学校数から見ても半分に過ぎず（『台湾教育沿革誌』台湾教育会，1939年，480頁），これらの学生に対しては「漢人」に近い扱いをされていたことが背景にあると考えられる。「平埔族」の特別扱いとしては，1922年の台湾教育令以降の「漢人」と「平埔族」の名目上の学校統一によって近接した両者の関係も背景にあらう。また，これら歴史教科書における鄭成功は，イスパニヤ人を追い払って三代20年間の台湾支配を樹立した鄭氏の初代として紹介されている。鄭成功だけではなく，西郷従道の征台の役による「原住民」批判もはっきりと両者の歴史教科書に記載されているため，日本が考える歴史事実と国語教材の性質に差があったことも要因として挙げられよう。なお，「高砂族」の学校（教育所）は，1943年の教育所ニ於ケル教育標準改正まで四年制または三年制であり，五・六年生が教授対象学年である歴史は教授されてこなかった。